

女房ども

БАБЫ

チエーホフ Anton Chekhov

青空文庫

ライブージ村の教会の真向うに、石を土台にした鉄板葺きの二階家がある。階下したには、ヂューチャというのが通り名の、この家の主人フィリップ・イワーノフ・カーシンが家族と一緒に住んでいる。二階は、夏はひどく暑くて冬はひどく寒いが、旅の官吏や商人や地主達が来て泊る。ヂューチャは土地を貸したり、街道の小料理屋を経営したり、タールや蜂蜜から、家畜かささぎ、鵲かささぎまで商つて、もう千八百ほど蓄め込んだ。それは町の銀行に預けてある。

長男のフォードルは工場の技師長をしている。百姓たちの言草によると、えらく出世をしたもので、今じや手も届かない。フォードルの妻のソフィヤは、器量のわるい病身な女で、舅しゅうとの家に住

んでいる。いつも泣いてばかりいて、日曜ごとに病院へ療治をして貰いに行く。ヂューヂャの二番目の息子は^{せむし}偻偻のアリヨシカで、親父の家に暮らしている。つい此の間、或る貧乏な家からワルワーラという嫁を貰った。これは若い器量好しで、健康でお洒落^{やれ}が好きである。役人や商人達が泊まるとき、お声掛りでサモワルを出したり^{とこ}床を敷いたりするのは、いつもこのワルワーラである。

ある六月の夕方、日が沈みかけて、空気には乾草や、まだ湯気の立つ家畜の糞や、搾り立ての牛乳の匂いがする頃、ヂューヂャの家の庭先に質素な馬車がはいつて来た。三人の男がそれに乗っている。ズツクの服を着た三十がらみの男。それと並んで、大き

な骨ボタンの附いた黒い長上衣を着た十七ほどの少年。馭者台には、赤シャツを着た若者が坐っている。

若者は馬をはずすと、往還へ連れ出して運動をさせた。旅人は手を洗って、教会の方を向いて祈祷を上げてから、馬車の傍に膝掛を拡げて、少年と一緒に夕食をはじめた。落着いた、物静かな食べぶりである。一生のあいだに沢山の旅人を見て来たヂューヂヤには、その道の人間らしい流儀で、これは真面目な、そして己れの値打をよく知っている人だなと頷かれた。

ヂューヂヤは帽子も被らぬチョッキ一枚の姿で、昇り段に腰を下ろして、旅人が話しかけるのを待っていた。彼は、睡気のさすまでの宵のつれづれに、旅人が色々な話しをするのに慣れていた

し、またそれを楽しみにしていた。婆さんのアフアナシーエヴナと嫁のソフィヤは、牛部屋で乳を搾っていた。もう一人の嫁のワルワーラは、開けはなした二階の窓際で、向日葵ひまわりの種子を齧かじっていた。

「その子供さんは、つまりあんたの息子さんですね？」と、ヂューヂャが旅人にきいた。

「いいや、養子です。みなし児ごしやうでして。後生ごしやうのため引取ってやりました。」

話がはじまった。旅人は話好きで、なかなかの能弁だった。話して行くうちにヂューヂャは、これは町から来た町人階級の男で、家作持でマトヴェイ・サヴィチという名だということを知った。

また、これからドイツ移住民の或る男に貸してある庭を見に行くところで、少年の名はクージカだということも分った。蒸し暑い晩で、誰も寝に行く気がしなかった。暗くなつて青ざめた星がちらほら瞬きだすと、マトヴェイ・サヴィチはクージカを引取つた次第を物語りはじめた。アフナーシエヴナとソフィヤは少し離れた所に立つて耳を澄した。クージカは門の方へ出て行つた。

「これにはね、爺さん、長い話があるんでさ」と、マトヴェイ・サヴィチは口を切つた。「あつたままを残らず話すとなつたら、夜通しかかつても足りません。もう十年になります、私の住んでいる街の、それもちようど隣合せの小さな家に、マルファ・シモーノヴナ・カプルンツェワという年寄りの後家が住んでいまし

た。この家は今じや蠟燭工場と製油所になつていますがね。この婆さんに息子が二人あつて、一人は鉄道の車掌でした。もう一人のワシヤは私と同一年で、母親と一緒に暮らしていました。亡くなつたカプルンツエフ老人はひきうま馬を五対も持つていて、町じゆうに荷馬車を出していましたが、婆さんもその稼業を継いで、馭者の取締りにかけては故人に劣らぬ腕前でした。だから日によつては稼あがり高が五ルーブルにもなることがありました。それに息子もやはり少しくらいは稼ぐのです。鳩の良種を育て上げて、好きな人達に売っていました。二六時ちゆう屋根の上にあがつて、箒を振り上げては口笛を吹いていました。鳩はもう雲とすれずれまで舞い上つていのですが、それでもまだ不足で、もっと

高く登らせたいのです。鶺鴒ひわや椋鳥むくどりも捕るし、鳥籠も上手こしらに拵こしらえ
ました。……なに詰らないと言つてしまえばそれまでです。だが、
それでも月に十ルーブルは転げ込みましたからね。……

「さてそのうちに、婆さんは足が利かなくなつて、床に就いてし
まいました。そんなことで、家を取締る女手が無くなつたのです
が、これは人間が片眼になつたも同じ事です。婆さんは急に慌て
て、ワーシヤに嫁を貰おうと思ひ立ちました。そこで直ぐさま仲な
人こうど婆さんと呼んで来る。あれでもないこれでもない、例の女
同士の話しが始まる。ワーシヤが見合いをして廻る。とどのつま
りは或る後家さんの娘のマーシエンカを探し当てました。手っ取
り早くそれに極めて、双方の承諾も済み、一週間のうちに万事片

が附きました。十七と言つてもまだほんの子供で、小柄でつんつるてんな娘さんですが、色の白い愛くるしい顔立で、それに年頃のお嬢さんとしての資格はちゃんと具わっています。嫁入の財産にしても、悪いことはありません。お金で五百ルーブル、痩せたりとても牝牛が一匹、それに寝台。……ところで婆さんは、やっぱり虫が知らせたのか、婚礼が済んで三日目に、そこには病氣も歎きもない天あめなるエルサレムへ旅立ちました。若夫婦は立派にお葬式を出して、水入らずの生活を始めました。半年ほどは人から羨まれる程の暮らしでしたが、そこへ突然新しい不幸が降つて湧いた。泣面に蜂つてわけです、ね、ワーシヤが募兵所へ籤くじを引き、に呼び出されました。可哀そうに兵隊に取られて、免除を願つた

がお許しがない。額をつるつるに剃り上げられ、ポーランド王国へ追いやられました。神様の思おぼしめ召しで何ともなりません。庭先で女房と別れるまでは無事でしたが、見納めに鳩のいる乾草棚を振り返った時にや、滝のように涙を流しましたよ。見るも哀れな様子でした。

「最初のうちは淋しくないようにと、マーシエンカは母親に来て貰いました。母親は、あのクージカが生れるまでは一緒にいましたが、出産が済むと、オボヤーニに嫁に行っていた他の娘の所へ行ってしまった、マーシエンカは赤ん坊と二人ぎりになりました。馭者に備ってある百姓たちは、五人とも酒飲みで図々しい野郎ですし、馬もいれば荷馬車もある。やれ垣根が崩れた、煙突の煤が

燃えついた——とても女の手には負えません。そこは隣同士の誼よしみで、詰らんことまで一々私の所へ相談に来るようになりました。そこで私が色々と極りをつけて、智慧を貸してやる……。まあ私も行けば上り込んで、お茶の一杯も飲みながら、世間話をするようになるのは自然の成行きです。私は若くて才覚もあり、四方山よもやまの話をするのが好きでしたし、向うも教育のある慇懃な女です。いつも小ぎつぱりした装なりをして、夏は日傘をさしました。偶たまにはこちらから宗教だの政治の話を仕掛けてやると、そうされるのが嬉しいのでしよう。お茶やジャムでもてなしました。……手短かに言えば、つまりその、私が人類の仇悪魔あだにつけいられるまでには、一年とはかからなかつたのです。彼女の家へ行かない日は、

何となく気分がすぐれず物足りないことに、私は間もなく気がつきました。でしよつちゆう、彼女の家へ行く口実ばかり考えていました。『もうそろそろ、冬の用意に窓の二重枠をはめて置くんですね。』——そう言つては枠をはめたり外はずしたり、明日の仕事に二枚ぐらいは残すように気を配りながら、一日彼女の所でぶらして過ごします。『折角ワーシヤの丹精した鳩が、もしやいなくなつては大変ですから数えて置きましょう』——まあそんな工合です。

「いつも彼女とは垣根ごしに話しができるのですが、仕舞いにはぐるりと大廻りをしないで済むように、垣根に耳門くぐりをこしらえました。とかくこの世の禍わざわいや躓つまづきは、女から来ることが多いもので

す。それも私たち罪深い者ばかりでなく、聖者さえこの道には迷います。マーシエンカの方でも、別に私を避ける素振りは見えませんが。夫を忘れずに身をつつしむどころか、私を慕うようになりました。私の姿を見ないとやはり淋しいらしく、しよつちゆう垣根の辺を行ったり来たりして、割れ目からこちらの庭先を覗いて見たりします。私も頭のなかの脳味噌が、夢心地でぐるぐる廻りだしました。復活祭週「復活祭日（春分後第一の満月に次ぐ日曜日、従って三月二十二日から四月二十五日の間に落ちる——）」に始まる「一週間」の木曜のことです。朝早く、やっと白みはじめた頃、市^{いち}へ行こうと彼女の家の門口に通るかかりました。悪魔も一緒について来たのです。見ると——その耳門^{くぐり}は上の方が四つ目格

子になっていましたが、彼女ももう起きていて、中庭へ出て鴨に餌をやっています。私はつい、彼女の名が口に出てしまいました。すると歩み寄って来て、格子越しに私を見つめます。色の白い可愛い顔、優しいまだ睡ねむそうな眼……。とてもきれいに見えたので、まるでそこが門口ではなく、名の日の祝い「「名の日」とはその人と同じ名の聖者の日。これを誕生日のように祝うのがロシアの習慣であった」でもあるように、お世辞をいいました。彼女は紅くなって、笑いだしましたが、それでも私の眼にじっと見入ったまま瞬きもしません。私は前後の見境もなくなつて、自分の氣持を打ち明けはじめました。……彼女は耳門くぐりをあけてはいつて来ました。その朝以来、私たちは夫婦も同然の暮らしをすること

になりました。……」

僵儻のアリヨシカが、往来から中庭へはいつて来て、誰の顔も見ずに息せき切つて家へ駈け込んだ。一分もすると風琴を抱えて、ポケットの銅錢をじやらつかせて駈け出て来た。向日葵の種子の音をさせながら、門の外へ小走りに消えた。

「あれは誰方どなたですね」と、マトヴェイ・サヴィチがきいた。

「息子のアレクセイでさ」とチューヂャは答えた、「また夜遊びに行きおつた、仕様のない奴だ。ああした片輪に生まれついたもんで、まあ大抵のことは大目にみてやりますだが。」

「二六時ちゆう遊び仲間と飲み歩いとりますだよ、もうしよつちゆう」アファナーシエヴナが溜息をついた、「大齋前の週間」

「復活祭に先立つ六週間の精進を大齋といい、その前週をマースリヤナヤ」（牛酪週間）と称する」に嫁を貰ってやりましたが、それで少しは収まるかと思いや、それどころか却って悪くなりおつて。」

「無駄骨ださ。よその娘を、ただ喜ばしてやったようなものさ」と、チューチャが言った。

教会の裏の方から、物悲しい^{さか}壮んな歌声が湧き起った。歌詞は聞き取れず、声だけが聞えて来た。テノールが二人とバスである。皆がそれに聴き入ったので、庭先は寂^{しん}としてしまった。……その声のうちの二つが、急に高笑いを響かせて絶えると、残るテノールだけが歌をつづけた。それも非常に高調子だったので、まるで

その声の昂まる極み大空にまで舞い上るかのようになり、思わず皆の眸が上の方を振り仰いだ。ワルワラが家から出て来て、日の光を避けでもするように手を眼に当てて、教会の方を見た。

「あれは、司祭の息子さんたちと学校の先生だわ」と彼女は言った。

また三つの声が合わさって歌いはじめた。マトヴェイ・サヴェイチは溜息をつくとき、再び話をつづけた。……

「さてそれからね、二年ほどすると、ワルシャワにいるワーシャから手紙が来ました。養生に家へ送り還されることになったというのです。病気なのです。尤もその頃は、私も馬鹿な考えはふつり思い切つて、いい嫁さんもちやんと極つていたのですが、た

だ可愛い女とどうして手を切ったものかしらと途方に暮れていました。今日こそはマーシエンカに言っ飛ばさうと、毎日そう思い立ちはするのですが、さてどう切り出したら女にきいきい声を立てさせずに済むものやら、見当がつきません。そこへその手紙なので、実はほっとしたのです。マーシエンカと一緒に読んだのですが、彼女は雪のように真蒼になりました。そこで私はこう言いました、『まあよかったね、これでつまりお前も、また御亭主のある女になれるというものだ。』すると彼女は、『私、もうあの人は一緒になりませんわ』と言うのです。『だってお前の御亭主じゃないか』と私。『少しは察して頂戴……。私、あの人なんか好きじゃなかったのですわ。お母さんの言附けで、いやいや

お嫁に来たのですわ。』——『そんな逃げ口上を言ったって駄目さ。馬鹿な女だ。ちゃんと教会で婚礼をしたんじゃないか。それとも、違うとでも言うのかい?』——『そりや婚礼はしましたわ。でも私はあなたが好きなの。死ぬ迄あなたと暮らしたいの。人は何と笑おうと構わないわ……。』——『お前はキリスト教徒だろう。聖典も読んだことがあるはずじゃないか。あれには何て書いてある?』

「一たび嫁ぎては、夫と俱ともに暮らすべし」ヂューヂヤが口を挿んだ。

「夫婦は一身同体です。『ね、二人は罪を犯したのだ』と私は言いました、『お前も私も。だがもうこれ以上はいけない。悔い改

めて、神様を畏れなければならん。ワーシヤにはすっかり打明けてしまおう。あれは穏やかな内気な男だ。まさかお前を殺すとは言うまい。』また、こうも言いました、『それに、怖ろしい神の法廷で齒がみをして、^{もが}き廻るより、この世にいる内に自分の夫の手で折檻して貰う方がまだましだ。』けれど、^{げす}下種女房め耳も貸しません。いやはや頑迷なものでして、何を言おうが『あなたが好きなの』の一点張りです。

「ワーシヤは、明日が五旬節という土曜日の朝早く帰って来ました。垣根ごしに何もかも聞えました。彼はわが家へ駈け込むと、一分ほど後にはクooジカを抱いて出て来て、泣き笑いをしていきます。クooジカにキスをしながら、眼は乾草棚へ行っています。ク

ージカを下へ卸すのも可哀そうだし、鳩の方へは行つて見たいし
という訳です。気の優しい情に脆い男でした。その日は無事に、
至極穏やかに暮れました。やがて晩禱の鐘が鳴りはじめたとき、
私ははつとしました。——明日は五旬節だ、だのになぜ彼らの家
では、門や垣根を緑葉で飾らないのだろうか？ こりや唯ただごと事では
ないぞ。……そこで行つて見ました。見ると、彼は部屋の真中で
じかに床ゆかに坐つて、酔払いのように眼をきよろつかせています。
涙が頬を伝わり、ぶるぶると顫える手で、包みの中から薄ビスケ
ットや、頸飾りや生しょうが姜パンや、まあ色んな土産物みやげを掴み出して
は、床一面に投げ散らかしています。クージカは三つでした。床
を這い廻つて、生姜パンを齧っています。マーシエンカはと見れ

ば、真蒼な顔をして煖炉の所につつ立って、身体じゆう顫わせながら、『私はもう貴方の妻じゃありません、貴方と一緒にいるのは厭です』などと、馬鹿のありつたけをほざいています。

「私はワーシヤの前にひざまず跪いて言いました、『ワシーリイ・マクシームイチ、われわれ二人は君に悪いことをしたのだ。どうか宥してくれたまえ。』それから起ち上つて、マーシエンカにこう言つてやりました、『マリヤ・セミヨーノヴナ、貴女もこれからはワシーリイ・マクシームイチの足を洗い、その水でも飲む覚悟なくしてはなりません。この人の従順な妻になつて、慈悲深い神様が私の罪を宥して下さい。私のために祈つて下さい。』まるで天使が一々耳に吹き込んで下さりでもするように、彼女にこんな

説教をしてやったのですが、話している内に胸がこみ上げて、涙が出てしまいました。まあそんな訳で、二日ほどするとワーシヤが訪ねて来ました。そして、『マチューシヤ、僕は君も妻も宥すことにしたよ』と、そう言います、『あれは唯の兵隊の女房だ。何しろまだ年端も行かぬ女のことだ、身が持てなかつたのも無理はない。こういうことは何も彼女あれに始まつたことではなく、彼女あれで最後という訳でもないのだ。ただね』と附け加えて、『お願いは、これまで君らの間に何事もなかつたように、そんな気振けりも見せないようにして貰いたいのだ。僕としてはせいぜい彼女あれに尽してやって、また愛を取戻すように力めるつもりだ。』そう言つて約束のしるしに手を差し出し、お茶を一杯飲んで機嫌よく帰つ

て行きました。『やれやれ有難い』と私はほつとしました。万事上首尾に運んだので、胸が清々せいせいしました。ところが、ワーシヤが庭先を出て行くと、入れ違いにマーシエンカがやって来たのです。ああ、何という責苦でしょう。頸つ玉に抱きついて、泣きながら、『ねえお願いだから棄てないで。あんたと別れたら生きちゃ行けないわ』とせがむのです。」

「飛んだひきずり女めが」と、ヂューヂヤが歎息した。

「私は足踏みしながら呶鳴りつけて、玄関へ引きずり出して戸の掛金を卸してしまいました。そして、『亭主の所へ帰るんだ。俺の顔へ泥を塗って呉れるな。恥を知れ』ってどなりました。こんな騒ぎが、それから毎日つづいたのです。」

「或る朝庭先へ出て、厩うまやの所で馬勒ばろくを直していると、いきなり彼女が耳門くぐりから駈け込んで来ました。跣足はだしで、下袴一枚の姿です。私に飛びかかって来て、両手で馬勒に縋りついて、顔も手も瀝青チヤンだらけにしながら身悶えて泣くのです。……『あんな厭な男とは一緒にはいられないわ。とても我慢がならないわ。もしもう愛してくれないのなら、いつそひと思いに殺して頂戴。』私はかつて、馬勒で二度ほど殴りつけてやりました。すると丁度その時、耳門からワ―シヤが、懸命な大声を上げながら駈け込んで来ました、『ぶつちやいけない。ぶつちやいけない！』そして駈け寄りざま、氣違いのように拳を振り上げて、力任せに彼女をどやしつけたのです。それから地面に引きずり倒して、踏む蹴る、いや大

変な騒ぎです。私がつめようとすると、今度は手綱を引掴んでぴしぴし打ちだすのです。打ちながら、まるで仔馬のようにひんひん言っているのです。」

「どうせ手綱でやるんなら、お前さんをやればよかつたよ……」
と、ワルワラが座を離れながら呟いた、「弱い女をひどい目に逢わせたりして、極道者……」

「ええ黙つとれ」とチューチャが呶鳴りつけた、「このあばずれめが！」

「ひんひん言ってるんです」マトヴェイ・サヴィチは続けた、「隣からは馭者が駈けつけて来ました。私は私で自分の所の下男を呼んで、三人がかりで彼の手からマーシエンカを離して、抱え

るようにして家へ運んでやりました。飛んだ恥曝しです。その晩、私は様子を見に行きました。彼女は身体じゆう罨あんぼう法の繃帯でくるまれて、寝台に寝ていました。出ているのは眼と鼻だけです。じつと天井を見えています。『今晚は、マリヤ・セミヨーノヴナ』と言つても黙つています。ワーシヤはというと、隣の部屋に坐つて、頭を抱えて泣いています。——『俺は悪党だ。自分の一生を台無しにしてしまった。ああ死にたい、死なせてくれ!』私は半時間ほどマーシエンカの傍そばについて、お説教をしてやりました。少々威おどかしてやったのです。——『行いの正しい人間は、あの世で極楽へ行く。だがお前なんかは大勢の姦婦共と一緒にゲヘナの火に投げ込まれる。……夫に齒向うのはやめなさい、あの人

の足許へ行つて跪きなさい。』けれども彼女は一言も口を利きません。瞬きひとつしないのです。棒^{ぼうぐい}杵^き相手に物を言うようなものです。

「その翌る日、ワーシヤが何かコレラのような病気になつて、日暮れには死んだという知らせがありました。葬式を出しました。マーシエンカはさすがに、恥知らずな顔や紫斑^{あざ}を人目に曝したくなかつたのでしよう、埋葬には立ち会いませんでした。ところが間もなく、ワーシヤの死は当り前の死に様ではない、あれはマーシエンカが盛り^も殺したのだという評判が、界隈^{かいわい}にぱつと立ちました。それがお上^{かみ}の耳にはいる。ワーシヤを掘り起して解剖して見ると、胃に砒素が残っていました。もう疑う余地はありません。

警官が来て、罪もないクージカもろともマーシエンカを引張つて行きました。牢屋へ入れられたのです。浅慮あさはかな奴であまりやりすぎたので到頭神罰が下ったのですね。……八カ月して裁判になりました。今でも憶えています、白い頭プラトチカ布をして、灰色の上うわつ張りを着て小さな腰掛に坐っていました。痩せこけて顔の色もなく、眼ばかりぎよろつかせて、見るも哀れな姿でした。後ろには兵隊が銃を持つて立っています。どうしても白状しません。傍聴人の中には、彼女が夫に毒を盛つたのだという人もありますし、夫が悲歎のあまり自分から毒を嚙んだのだと言い張る人もありました。私も証人として呼ばれていましたが、いよいよ訊問の番が廻つて来ると、良心の命ずるままにすっかり申し立てました。――

—『悪いのはこの女でございます。今更隠し立てをしても始まりませんが、もともと夫を愛しておりませんのです。一体この女の性質は……』裁判は朝から始まって、夜が更けてから判決が下りました。シベリヤにて十三年の徒刑に処す。

「そういう判決が下りてからも、マーシエンカは町の監獄に三カ月ほどおりました。私はよく茶や砂糖などを持つては、見舞いに行つてやりました。これも人情です。ですがあの女は、私の姿を見るが早いか身体じゆうを顫わせて、両手を振りながら眩きます——『行つて、あっちへ行つて。』そして、まるで私が攫さらつて行くきはしまいかと怖れるように、クージカをしつかり抱き緊めるのです。『そら御覧、到頭こんな事になつてしまった。ああマーシ

ヤ、お前も可哀そうな女だ。あのとき折角俺が教えてやった事を聴かないもんだから、今じやその償つぐないをしなけりやならん。みんな身から出た錆だ。誰も怨むでないぞ。』——そんな風に説教をしてやっても、『行つて、あつちへ行つて』と言ひ通しで、クージカと一緒に壁にへたばり着いて、ぶるぶる顫えています。いよ町を離れて県市へ送られるときは、停車場まで送つて行つて、後生のため一ルーブル札を包みへ押し込んでやりました。だがシベリヤまでは行きつけなかつたんで……。県市で熱病にかかつて、その監獄で死にました。」

「犬にや野垂のたれ死にが丁度似合つとる」と、ヂューヂヤが言った。

「クージカは送り還されて来ました。……私はさんぎ考えて見た

挙句に、引取つてやることにしました。だって、何ぼ懲役人の子にしろ、やっぱり息の通つた人間だし、洗礼も受けていますからね。……思えば可哀そうな奴です。まあ番頭代りに使つて、万一私に子供が出来なかつたら、商人に仕立ててやつてもいいと思つています。今じゃ何処へ出掛けるにも、一緒に連れて歩きます。見習わせて置かなければね。」

マトヴェイ・サヴィチが話しているあいだ、クージカは門口の石の上に坐り通していた。両手を後頭に当てがって天を見つめている姿は、暗がりの中の遠目には木の根つこのように見えた。

「クージカ、もうこつちへ来て寝ろ」と、マトヴェイ・サヴィチが呼んだ。

「そうさ、大分更けましただ」ヂューヂャは起ち上りながら相槌を打った。そして大きな声で欠伸あくびを一つして、附け加えた、「自分の料簡に頼つて人の言うことを聴かない者は、つまりそうした事になる。」

月はもう中天に漂つていた。非常な早さで走っている。下の雲はそれと反対の方角に走っている。雲の方はずんずん行つてしまふが、月はいつまでも中庭の上に見えていた。マトヴェイ・サヴェイチは教会の方を向いて祈祷をしてから、お寝みを言つて馬車の傍の地面に横たわつた。クージカもお祈りを上げて、これは馬車の中に、長上衣にくるまつて横になつた。楽に寝られるように、彼は乾草の真中に穴を拵えて、膝頭に肘が届くほどまん円くなつ

ている。ヂューヂャが階下の自分の部屋に蠟燭をともし、眼鏡をかけて、小さな本を手にして一隅に立っているのが中庭から見えた。彼は長いこと本を読んでは拜んでいた。

お客は寝入った。アフアナシーエヴナとソフィヤとは馬車の傍へ寄って行つて、クージカを眺めはじめた。

「みなし子はよう寝とる」と老婆が言つた、「瘦せこけて、骨と皮ばかりだ。生みの母親がなけりや、心から世話をする者もないからの。」

「私のグリーシユトカの方が、二つぐらい年上らしいね」とソフィヤが言つた、「工場で母親もなしに、懲役人みたいな暮らしをしてるわ。旦那に打たれてるかも知れないね。この子を一目見た

とき、自分のグリーシユトカのことを思い出しちまったよ。心臓こころん所の血が固まっちゃうような気がしたつけ。」

一分ほど沈黙のうちに過ぎた。

「母親のことは憶えちやいまいの」と老婆が言う。

「何で憶えてるもんかね。」

そう言ったソフィヤの眼から、大粒の涙が落ちた。

「猫のようにまんまるになつてき……」と、彼女はこみ上げて来る情愛と不憫さに、啜すすり泣くような笑うような声を出した、「ほんとに可哀そうな……」

クージカはぶるつと身顫いして、眼をあけた。するとすぐ眼の前に、みつともない皺くちやの泣き腫らした顔が見え、その隣に

は鉤かぎ鼻ばなで頤おとがいの尖った、齒の一本もない老婆の顔が見えた。二つの顔の遙か上の方には、雲が飛び月が漂う底知れぬ夜空がある。彼は恐怖のあまり叫び声を立てた。するとソフィヤも叫び声を立てた。木魂こだまがその二つの叫びに応えて、蒸暑い空気が一しきりざわめいた。隣の番人がかちかち鳴らし、犬も何処かで吠えはじめた。マトヴェイ・サヴィチは何か夢のなかで呟いて、寝返りを打った。

夜が更けて、ヂューチャも婆さんも隣の番人も寝てしまった頃、ソフィヤは門の外へ出てベンチに腰を掛けた。寝苦しかったし、それに泣いたので頭が痛かった。往還はひろくて、どこまでもつづいていた。右の方に半里、左の方にもそれくらいつづいて、そ

の先は見えなかった。月はもう庭先をはずれて、今では教会の後^う方^{しろ}にかかっていた。往還の片側は月の光に溢れ、片側は影になって黒かった。白楊^{ポプラ}と椋^{むくどり}鳥^{とやさお}の鳥舎竿の長い影が道幅一ぱいに伸び、教会の大きな影は黒々と脅かすように、ヂューヂヤの家の門を蔽い、家の半ばにまでかぶさっていた。人影はなく、しんとしていた。時々往還の末の方から、微かな音楽の音がつたわって来た。アリヨーシヤが風琴を弾いているのだろう。

教会の囲いのあたりに、誰かが歩いていて、人間なのか牛なのか、見わけはつかなかった。それとも誰もいるのではなくて、ただ大きな鳥が樹の枝を騒がせただけかも知れない。すると暗い陰から人が出て来て、立ちどまって何やら男の声で言うと、教会に

ついで横町に姿を消した。暫くすると門から二間あまりの所に、別の人影が浮び出た。教会から門の方へ、真直ぐに歩いて来たが、ベンチにいるソフィヤに気がつくど立ち停つた。

「ワルワーラじゃないかね？」と、ソフィヤがきいた。

「私だったらどうしたのさ。」

それはワルワーラだった。彼女はちよつと立ちすくんでいたが、やがてベンチに寄つて来て腰を下ろした。

「何処へ行つてたのかね？」とソフィヤがきく。

ワルワーラは何も返事をしない。

「ふしだらな真似をして、後で後悔しないがいいよ」とソフィヤが言つた、「聞いたろう、マーシエンカの話あしげを。足蹴あしげにされる、

手綱たづなでひゆうひゆう打たれる。お前さんも用心おしよ。」

「構うもんか。」

ワルワラは頭布のなかでくすつと笑つて、小声で囁いた。

「坊さんの息子と一緒にいたのさ。」

「なにを馬鹿なことを。」

「本当だとも。」

「罰当りな。」

「構わないさ……。困りやしないさ。罰当りなら罰当りでいいさ。こんな暮らしよりや雷様にでも打たれた方がましだもの。私は若いし身体も丈夫なのに、亭主は偃僂で厭らしい業ごうつく張りで、チユーチャ爺に輪をかけたような悪者さ。娘の頃にはパン一つ満足

に貰えず、いつも跣足はだしでいたんで、貧乏が厭さにアリョーシカの小金に眼がくらんだのさ。そいで魚籠びくの中の魚みたいに捕まっちゃうた。あんな疥癬やみのアリョーシカと寝るくらいなら、蛇とでも寝た方がましさ。そういう姉さんの暮らしはどうなの。眼も当てられやしない。フョードルはお前さんを工場から追い出して他の女ほかを引き入れるし、俵までお前さんの手から挽もぎ取って、奴隷境涯に売り飛ばしたじやないか。お前さんがいくら馬みたいに稼いだところで、親切な言葉ひとつ掛ける者はない。……こんなことなら嫁なぞには来ずに、一生くよくよ暮らしをした方がましさ。坊さんの息子から五十銭貰うなり、乞食をするなり、井戸へ飛びこむなりした方が、よっぽど増しき……。」

「罰当りな」とソフィヤがまた囁いた。

「構うもんか。」

教会の裏の方で、また例の三つの声が悲しげな歌を歌いはじめた。二つはテノールで、一つはバスである。やはり歌詞は聞き取れない。

「宵っ張りな人たちだ……」とワルワラが笑う。

そして彼女はひそひそ声で、坊さんの息子と毎晩逢引をしていることや、彼がして聴かせる話や、その遊び仲間や、家に泊る役人や商人たちとも面白可笑しく遊んだことなどを話した。物悲しい歌声は、自由な生活への憧れをそそり立てた。ソフィヤは笑いはじめた。そんな話を耳にするのが罪のような気もし、空恐ろし

くもあり、またうつとりと快くもあつた。なぜ自分も、若くて綺麗なうちに罪作りをして置かなかつたのかと、口惜しいような羨ましいような気がした。……

古びた教会の境内で、夜番が十二時を打ち鳴らした。

「もう寝る時だ」起ち上りながらソフィヤが言った、「ヂューヂヤに見附かるといけないよ。」

二人はそつと庭先へはいつた。

「私出てつたので、マーシエンカがどうなつたのか聞かなかつたわ」と、窓の下に寝る支度をしながらワルワラが言った。

「牢屋で死んだとき。亭主に毒を盛つてね。」

ワルワラはソフィヤと並んで横になって、ちよつと考えてか

ら小声で言った。

「私なら、アリオーシカを盛り殺しても後悔はしないね。」

「またそんなことを……。」

ソフィヤがうとうとしたとき、ワルワラは身をすり寄せて耳に囁き込んだ。

「ヂューチャとアリオーシカをやつちまおうか、姉さん。」

ソフィヤはぶるつとしたが、何も言わなかった。やがて眼をあいて、身動きもせずいつまでもじつと空を見ていた。

「人に知れるよ」と彼女は言った。

「知れるもんか。ヂューチャは年寄りでもう死んでもいい頃だし、アリオーシカの方なら、飲み過ぎで死んだことになるさ。」

「怖^{おっ}かない。神様が取り殺しなさる。」

「構うもんか。……」

二人とも眠らずに、黙って考えていた。

「おお寒む」ソフィヤは身体じゆうがくがく顫えながら、そう言った、「もうじきに朝だ。……寝たかね。」

「いいや。……姉さん、私の言ったことなんぞ気に掛けなさるな」とワルワラは囁いた、「つい業つく張り共に腹が立って、口から出まかせを言ったんだから。おやすみよ、もう明るくなるわ。」

「……おやすみよ……。」

二人は黙って静かになつた。そして間もなく寝入つた。

一番先に眼を醒ましたのは婆さんだつた。彼女はソフィヤを起

して、二人で乳を搾りに牛部屋へ行つた。偃偻のアリョーシカがひどく酔つ払つて、風琴を失くして歸つて来た。道傍へ転げ落ちたと見え、胸も膝も埃と藁で汚れている。よろよろしながら牛部屋へはいつて来て、そこにある櫛そりの中に着物も脱がずに倒れると、すぐさまいびき軒をかきはじめた。日が上つて、教会の十字架がまずきらきらと燃え、やがてそれが窓に移り、庭先の露を置いた草のうえに木々や車井戸が影をひきはじめたとき、マトヴェイ・サヴィチは跳ね起きて、慌だしく駈け廻りはじめた。

「クージカ、起きろ」と彼は叫んだ、「馬を附けるんだ。しやんしやんしな。」

朝の忙しさが始まつた。若いユダヤ女が、裾飾りのついた褐色

の着物を着て、水飼いをしに馬を庭先に引いて来た。井戸の滑車が悲しげに軋きしり、釣瓶つるべのぶつかる音もする。……クージカは身体一面に露を浴びて、睡だるくて懶だるいらしい。馬車の中に坐つて、のろくさと長上衣を着ている。そして釣瓶の水が井戸の中で撥ね散る音に耳を澄まして、寒さに首をすくめる。

「小母さん」とマトヴェイ・サヴィチがソフィヤを呼ぶ、「あの若僧に、早く馬を附けろと言つて来て下さらんか。」

ヂューヂヤがそのとき窓から叫ぶ。――

「ソフィヤ、あのユダヤ女から水飼料に一銭取つて置け。しよつちゆう這入つて来くさる、疥癬やみめが。」

往還では羊が走り廻つて、メエメエ啼ないている。女房どもが牧

飼いにやいやいやい言うが、こちらは平気だ。蘆笛を吹きながら鞭を鳴らしたり、しわが唳れただみ声で何やら言い返す。庭先へ羊が三匹迷い込んだ。出口が分からなくなって、垣根を頭でつつく。物音でワルワラも眼を醒まして、寢床をぐるぐる巻きに抱えて、家へはいつて行く。

「羊ぐらい追い出したってよかる、ここな嬢ちゃんや」と婆さんが喚く。

「ふん、ヘロデの奴隷じゃあるまいし——ワルワラが家にはいりながら吠く。

馬車に油を差して馬を附けた。チューチャがそろばん算盤を抱えて家から出て来る。そして昇り段に腰を下ろして、泊りと燕麦と水飼

い賃は幾らになるかと勘定しだす。

「高いよ、爺さん、その燕麦の代は」とマトヴェイ・サヴィチが言う。

「高けりや持つて行きなさんな。俺^{わし}らあ、押売りはしねえ。」

さていよいよ馬車に乗り込む段になって、ちよつとしたごたごたが出発を引き留めた。クージカの帽子が見えなくなったのだ。

「ええこの餓鬼め、一体どこへ置き忘れたんだ！」とマトヴェイ・サヴィチが声を荒らげる、「何処だと言うに。」

クージカの顔は恐怖で歪んだ。馬車のまわりを走り廻つて見たが無いので、門口へ駈けて行き、それから牛部屋へ駈けて行つた。婆さんとソフィヤも一緒になって探した。

「耳たぶつ朶引たぶつちぎるぞ」とマトヴェイ・サヴィチが呶鳴った、

「やくざ者めが。」

帽子は馬車の底に落ちていた。クージカは袖で藁を払ってそれを被り、背後うしろからがあんとやられはしまいかと絶えず恐怖の色を浮べながら、おずおずと車に這い込んだ。マトヴェイ・サヴィチが十字を切り、若者が手綱をとると、馬車は動きだして庭先を出て行った。

青空文庫情報

底本：「チエーホフ全集 8」中央公論社

1960（昭和35）年2月15日初版発行

1980（昭和55）年6月20日再訂再版発行

入力：米田

校正：阿部哲也

2010年9月6日作成

2012年2月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

女房ども

БАБЫ

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 チェーホフ Anton Chekhov
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>